
もう一人の私へ・・・

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人の私へ・・・

【Nコード】

N2885D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

白石歩は『ごく平凡な学園生活を送る』という自分で決めた法則があった。それは、内にあるもう一人の私をひた隠しにしたいため。そう、彼女は自覚症状がある二重人格者であった。そんな彼女を、大事な学園祭でシンデレラ役に抜擢したクラスで人気者の岡部。さてさて一体どうなる？学園物にちよつとしたファンタジーが入った作品です。

#1 シンデレラ

『ごく平凡な学生生活を心がける』

それが白石歩の中学生における何より安心できる生き方であった。別段目立つ容姿でもない。ましてや、話し上手でもない彼女にとっては難しいことでは決してなかった。何処にでもいる一中学生である。それなのに、こんな生き方をしようと定めるのはおかしいように思われるのだが、一つだけ他の誰にも話せない秘密があった。

それは、『自らが二重人格者』だという自覚症状である。

しかしこれは自己管理を怠った為ではなかった。ましてやトラウマが有ったの事象ではない。無意識に自覚はありはするが、発動するのは決まって睡眠に陥る時である。未だもって理由は分からない。しかしそれは自らの意思ではなく突然やってくるのである。どうしても逃れられないそんな病なのである。

「クラスの出し物、文化祭の劇はシンデレラとなりましたが、その主役などの配役及び、スタッフを今から割り当てたいと思います。自薦、他薦遠慮なく自由に発言ください！」

勇姿を募るとクラス委員長が、教壇に立ち積極的にこのクラスを纏めようとしていた。

それもそのはず、この文化祭のアンケート結果で優秀クラスには賞金が出ることになっているからだ。それでなくても二年B組は他のクラスより目立ちたがりが多いクラスといっても良い。特にイベントの際、粋の良いやからが多いクラスでもあった。

そんな中、歩は自分には関係ないと心の中でつぶやき、このお祭り集団から目を背けていた。早くこんなイベントなど終わってしまえば良いのにとさえ思っていた。窓際に席を設けていると、サンサンと差し込んでくる太陽の光は歩を意志とは関係なく眠りに誘おうとする。

『今日は一段と天気が良いなあ』

青空の中自由に飛びまわっている白い鳥を眺めながらボくと外の景色を見渡した。早く家に戻ってのんびりしたいなと、上の空にもなっていた。人間こういう自分には関係ないことを周りがやっている時、他の事を考え始めてしまう。それが一番気楽だからであるからだ。

そんな時、

「シンデレラの役は、白石さんがいいと思います！」

一人の少年が挙手し、立ち上がると歩の名前を口走ったのである。周りは当然ざわついた声を上げた。当の本人といえば、何が起こったのかと訳が分からずに、きょとんと椅子に座ったままその少年を振り返った。

「おい！岡部！そんなの無理じゃないか？全然役に合っていないぜ！灰被りの時ならまだしも！それに、白石さんに演技ができるなんて思えないぜ？」

当然跳ね返ってくる反対意見で、教室はざわめき始めた。

「そんなことないぜ！絶対出来るって！俺が保証するね！」

岡部という少年は、有名なクラスのお祭り男であり、容姿も良い上頭の回転も速く人気も高い。そんな少年の発言力は絶大だ。それを知っているからこそ、何故自分を押したのかは歩には理解できなかった。歩においては、この岡部とハッキリ言って面識というのは皆無といっても良かった。

「えー静かにしてください！静かに！」

クラス委員長はこのざわめきを押し止めようと冷静に処置した。

「じゃあ、当の本人に訊いてみましょうか？」

突然歩に話が振られて戸惑った。関係ないと思い込んでいたことが起こった時、陥る現象。何をどう説明すればいいのか分からなかったのである。

それからどのくらい時間が経ったであろうか？歩には長い時間が経ったように思われる。

「あ、その……私には大勢の前で演技をすることなど出来ません」
恐る恐る立ち上がると、ボソボソと言葉に出した。

「もっと的確な人にやってもらうべきだとそう思います……」

あまりにも小さな声であったためか、教室の端まで声が届いていなかった。その為、

「おい、何言ってるかわからねえぞ！」

端のほうから罵声を浴びせられた。

「聞こえないんじゃないか!?」

ガタリという大きな音を立てて岡部は立ち上がった、そして、歩の弁護をする。

何故この男はそんなに自分を押すのか到底計り知れなかった。こんなこと初めての出来事だったから。

「俺が押すといったらそうなんだから良いんだよ！」

是が非でも主役を歩にやって欲しいとそう考えていることだけは分かった。が、何故?

「それでは、挙手をお願いします。シンデレラは白石さんで良いと思う方？」

歩自身の発言を無視し、岡部の勢いに押されたクラス委員長は多数決を採ることにした。そうしないとこの事態を収拾することが出来なさそうであるからであった。岡部が入ったらもう、誰もこれ以上反論できないのだ。

「多数決で、過半数以上の挙手により、シンデレラは白石さんに決定しました」

呆気なくことは進んでしまった。眠気も何も驚きの事件。それを歩はただ見詰めることしか出来なかったのであった。

#1 シンデレラ（後書き）

短いお話ですが、何とか章に区切ってみました。ちょっとしたファ
ンタジーをお楽しみください。何かが心に残れば幸いです。

#2 配られた台本

数日後の放課後前のホームルームで、劇の台本が配られ歩はそれを手に取り困惑の表情で眺めていた。

結局、王子は岡部がやることになり、継母やその娘たち、魔法使いなどの配役は希望者および推薦で決められていた。どの役も個性に合った配役であり、文句のつけられないのは歩自身にも分かっていた。だから、台本の表紙に自分の名前が刻み込まれているのは似つかわしくなくて、何度も目を瞬かせた。

「練習は明日から始めます。台本はアドリブも可です。演技上良いなどと思ったらドンドン取り込んでください」

今回の台本は、脚本化志望の池田が担当していた。演技、メイク、小道具、大道具、美術などの担当になった者は一日前から動き始めている。本当にお祭り好きのしそうな行動であった。

「やあ、白石さん。どう？シンデレラ役に抜擢された気分は？」

岡部と会話をするのはこれが初めてだった。何しろこの少年の周りにはいつも人が群がっている。それに話すことなど何もなかった。

「何故、私なんか推薦したんです？私には荷が重過ぎます……」
俯いてボソボソとしか問いかけられない。

「何言ってるんだよ！十分合っていると思うよ？不思議だったんだよね〜目立たない様に振舞っているけど、白石さん本当はかなり行動派でしょ？」

岡部は、ニコニコしながら歩に問い返してきた。

「え？」

歩は驚きの表情を隠しきれなかった。私が行動派？疑問が頭の中をグルグルと回り始める。行動派と呼ばれる筋合いが有るのはもう一人の私で……

「凄いバイタリティー有るのにさ、何故隠しているの？演技なんかしなくて良いのに。自然体が一番だよ？」

一番だよって言われても、これが本当の私なのに……もう一人の私は私じゃなくて……

説明できれば良いが、それが出来ないから困る。誰にも言えない秘密。

「誰かと間違っているんじゃない？私はこんなに地味で面白みの欠ける人間だよ……」

そう、それが私。

「間違はなく白石さんだよ。ほら覚えてないかな？電車の中で会ったじゃ無い！声は掛けなかったんだけど。夜半の電車で痴漢に会った女の子助けたでしょ？俺その現場を目撃したんだよ！痛快だったな」

岡部はもう一人の私に逢ったんだとこの言葉でハッキリ理解した。私の記憶の空白部分。この時怖くなった。他にももう一人の私を知る者が居るんだとそう認識したから。

「見間違いだよ。私、夜に外出してないから」

「うーん。隠したいのかもしれないけどさ、俺が人を見間違うはずないもん。あれは白石さんだった！……ま、追求されたくないことも有るかも知れないけれど……」

一瞬だったが、岡部の言葉がどもった。その理由は良くわからないけれど、歩は聞き返さなかった。とにかく、十分気を付けないといけない人物だとそう思っていたからである。

「演技の練習は明日からって事だけど、どうする？早めに練習したほうが俺は良いと思うんだけど？」

岡部は話を切り替えた。

「そうね。でも他のみんなはどうなの？練習出来そう？」

やるからには、きちんとやり遂げたい思いはある。そういうところは負けず嫌いで中途半端には出来ない。

「二人やるよりは良いよなうん。みんな集めてくるよ。ちょっと待ってて！」

すかさず岡部はクラスの配役に抜擢された者達に声を掛け始めた

のである。

劇の練習は取り敢えず劇の台本から始まった。それぞれの立ち位置で演技の練習も兼ねながら。しかし、歩はトチってばかりで、進行が遅れていく。

「ねえーやはり無理なんじゃない？」

継母の子がやってられないわと台本を片手に呆れていた。

「まだ始めたばかりだろう！白石さんだってこなれてきたらうまく出来るようになるよ」

弁護に回る岡部ではあったが、

「始めたばかりって言っても、台本見てるのにトチる？集中力散漫じゃ無い？しかも棒読み出し！」

歩はその言葉を受けてショックを受けた。自ら進んでやっているわけでないにしろ、真面目にはやっている。それを捕まえてそんな暴言はないだろうと思った。でも、何も言い返せない自分が腹立たしい。

「今日はこの辺で止めとこう。明日までに、取り敢えず出来る範囲の台詞を本ありでも出来るようにしておこうか……」

確かにこのままやっても前には進まない。夕方遅くまで練習したその最後を岡部は締めくくった。

「白石さん。別に気にすることないよ。文化祭まで十分時間は有るからさ！何なら、俺、練習に付き合っても良いし」

推薦して事を気にしているのか、責任を感じているのか？優しい意言葉を掛けてくる。でも、やはり歩の配役は間違っていないと思うっているらしい。

「良いよ。何とか頑張ってみるから……」

学校の校門前で歩が出てくるのを待っていたのか、岡部がひよこっつと顔を覗かせてそう言ったのを歩は撥ね退けた。別に恨んでいるわけではないが、付きまとわれるのは面倒だ。

そう感じたからである。

「そう？でももし練習相手が必要だったら気軽に言ってくれよな？俺、付き合うから！」

岡部は拒否されたにもかかわらず、相変わらず笑顔で言い添えてその場を去った。その笑顔が余りに無邪気だったため、歩は戸惑った。何でそこまで自分に好意的でいられるのか謎だったから……でも、安心できない。ただ歩は何事もなく文化祭が終わることだけを願っていた。

#3 平凡の定義

「白石さん。別に気にすることないよ。文化祭まで十分時間は有るからさ！何なら、俺、練習に付き合っても良いし」

推薦して事を気にしているのか、責任を感じているのか？優しい意言葉を掛けてくる。でも、やはり歩の配役は間違っていないと思うっているらしい。

「良いよ。何とか頑張ってみるから……」

学校の校門前で歩が出てくるのを待っていたのか、岡部がひよこつと顔を覗かせてそう言ったのを歩は撥ね退けた。別に恨んでいるわけではないが、付きまとわれるのは面倒だ。そう感じたからである。

「そう？でももし練習相手が必要だったら気軽に言ってくれよな？俺、付き合うから！」

岡部は拒否されたにもかかわらず、相変わらず笑顔で言い添えてその場を去った。その笑顔が余りに無邪気だったため、歩は戸惑った。何でそこまで自分に好意的でいられるのか謎だったから……でも、安心できない。ただ歩は何事もなく文化祭が終わることだけを願っていた。

その夜、歩は台本を片手に台詞を何度も繰り返して読み上げた。しかし、トチることはなくなっても、どうしてもこの役に心を許すことは出来ず感情が籠らないまま落ち込んでいた。

そんな時、母親が歩の部屋に訪れたのである。

「何やってるの？」

不思議そうに問いかけられて、歩は黙り込んだが、台本をただ差し出しただけだった。

「シンデレラ？……あら、もしかして主役演じることになったの？」
驚きの表情で問いかけられ、歩は首を縦に振って肯定した。

「そう……出来そうなの？」

その言葉に、

「仕方ないよ。決まったものは……」

「仕方ないで役を引き受けるなんて……出来ないなら早々に断るべきよ」

「断るタイミングが無かったのよ……でも、やるからにはちゃんとやりたいって思ってる」

言われなくても分かっているとしたいのだ。

「そう……なら良いわ。頑張るなさい。文化祭よね？ちゃんと見に行ってあげるから……」

母は、それだけ言うと、歩の部屋を出て階段を下りていった。

何だろうか？珍しいこともあるもんだとそう思った。歩野性格は知り尽くしているだろうに、珍しく見に来るなんて言っている。未だかつてこんなことは無かった。

途中邪魔は入ったが、夜更け迄練習を繰り返したのである。

「おはよう、白石さん！」

朝からテンションが高い岡部の声に、歩はゲッソリした表情で机の前に座っている岡部に軽く会釈した。

「台詞は覚えたわよ……もうトチったりだけはしないわ」

「昨日だけで覚えたの？さすが見込んだだけのことはあるね！」

岡部は歩の心を知らずに笑っている。何とかこの能天気な笑顔をやめてもらえないだろうか？と思ったが口には出さなかった。

「また放課後練習するよ。あ、そうそうシンデレラが魔法使いに魔法を掛けられての早代わりはドライアイスが噴き出しているその間にする事になったから、その練習も頑張らないとね？」

演出の希望でそう言う事になったらしい事をこと細かく話して聞かせてくる。

「そう。分かったわ」

興味なさ気に一言返事する。それを合図にしてチャイムが鳴った。

そして、いつもの授業が始まるのであった。

授業中眠くて仕方が無かった。しかし、ここで眠ってしまったのはいつもう一人の私が呼び覚まされるか分らない。そう考えると怖くて眠たい目を擦りながら黒板を眺める。先生の声と黒板に書き込まれる音が反響している。それだけを頼りに歩は授業を受け続けた。

その日の放課後からの劇の猛特訓や、綿密な打ち合わせは歩にとってハードな日々へと変わっていく。特に小道具や衣装が出来た頃にはその着替えや早代わりまでも事細かく行われるようになっていったのである。

そんな中、歩自身も、クラス全体が纏まりつつあるのを見届けるにあたり、自分の考えを少しずつだが改めるようになって、演技にも熱が籠るようになっていた。こうなってくると、今では主役を歩が演じることに反対する者も居なくなり、岡部の自慢げな発言の中、同等の立場で役を演じる仲間としてみんなを認めるようになっていった。

「あのさ、もっとシンデレラを可哀相に見せるにはこうしたほうが良いんじゃないかな？その方が観客の心を惹き付けられるし？」

次から次へと湧き出てくる案や発言。その中に組み込まれ自ら良いと思ったことをアレンジしつつ役作りは進む。それがいつの間にか楽しくなっている自分に気が付いた頃には、

『ごく平凡な学生生活を心がける』と言う事を忘れきっていた。というより、平凡がどういったものなのかの基準が見えなくなっていたのかも知れないと歩は思ったのである。

#4 変化

「最近明るくなったわね？」

家に帰って母にそう言われた時初めて気が付いた。がむしやらにご飯を掛け込むその姿を母は不思議に感じたのであろう。

「……」

「夜もちゃんと寝ているようだし、健康的で何よりだわ。本当は心配していたのよ。毎夜遊びに行っているあなたを見てたから」

歩はドキリとした。バレているなんても思ってもいなかったからである。遊びに行っている記憶があるわけではない。ただ、パジャマで寝ていたはずなのに起きてみるとどういう訳か？ 自らの好みと反する服を何処で手に入れたのか身に纏っているのである。

「お母さん……私が夜出歩いているの知っていたの？」

母と子二人暮らしの生活。父は歩が幼稚園生の時交通事故で亡くなって以来ずっと二人で生活していた。それを不幸だとは思わなかったにしろ、夕方遅く仕事で帰ってくる母親が自分のことを気に掛けていてくれたことを嬉しく思った。

「出歩いているのは気づいていたけど、何だか歩らしくないから声掛けづらかったのよ。母親として失格なのかも知れないけど、自由にさせておく方が良いかと思うっていたから……でも安心したわもう出歩いてないようだし。あのね？……ううん。良いわ。また機会があったら話してあげるから……」

……劇頑張りなさい」

そう言って言葉を切った。歩は何を言いたいのかわからなかったが、自ら話さない事を追求するものなんだな。と思いそのまま食べ終わった食器を流しに持っていくと二階に上がっていった。

そして、月日は流れ文化祭当日になった。秋晴れの清々しい幕開

けとなる。

さすがに緊張する。練習で何度も台詞をこなしてきているが、もし、ミスったらという感情を捨ててはおけない。それに体育館には、人が大勢入っている。初めての経験で思わず膝がガタガタと震えてくる。それを見ていたのか、岡部が、

「あれは、みんなかぼちゃだと思えばいいんだよ。魔法使いがかぼちゃにしたんだってね」

それを聞いて笑いがこみ上げてきた。わざわざ魔法使いを例に挙げなくても良いのにと。

そんな笑いをこぼした頃には緊張が解かれていた。何だろう？何故、こう岡部は自分をこんなに見てくれているのだろうか？だいたいの事の始まりは岡部の勝手な発言からだった。でも、何度でもフォローしてしてくれた。今の自分がここにこうしていられるのは、岡部在ってのことだと気が付くと、感謝したい気持ちが芽生えてくる。「おっ！予算無いのに良くこれだけの大道具出来上がったな！美術頑張ったじゃん。俺の出番終わりのほうだけだから、支えるの手伝うぜ！いろいろ言えよな〜！」

歩との会話が終わったら直ぐにクラスメイトのみんなの中心に入っていく。こういう心配りが出来るから、いつでも輪の中心人物になれるんだろう。お祭り好きだなどと考えていた自分を恥じた。そして、今までの自分を振り返ってみる。何処にも他人を思いやる姿勢を持ったことが無いんだなと鑑みると、変わらなければいけないんだとそう思った。

クラスとしての出番は中ごろ。まだまだ先の順番だと思っていたが、時間は直ぐに流れて行った。舞台の袖に隠れて見守ることになり、周りは息を潜めて出番を待っている。

そんな時ふと目に入った人影。

『お母さん……』

仕事で忙しいはずなのに、言ったとおり初めて見に来てくれた。

考えてみれば、幼稚園の運動会以来である。父が亡くなってからは一度だって来てくれることは無かった。仕事仕事で歩は一人きりの行事を送ることが多かった。それを冷静に判断して、いい子を装い親を困らせることが無かった分この事は衝撃だった。本当の気持ち言うとうと、泣き出したいほど嬉しいのである。

『来てくれた……』

「そろそろ前のクラスが終わるぞ、用意しとけよ……」

ボソボソと岡部が歩に耳打ちした。

「あ、うん」

「どうした？……」

赤く涙で潤んでいるその瞳を確かめたのか？ 岡部は軽く歩の肩を二回ほどなだめるようにポンポンと叩くと、準備に入る。歩も、気合を入れなおすと光り輝く舞台へと足を向けた。

#5 ハプニング

劇も中盤。それまでは、全く差し支えることなく順調に進んでいた。歩自身も満足できる芝居が出来たと思う。

しかし、このクラスの一番の見せ場である魔法使いがお城にいないシンデレラに魔法を掛けるという瞬間早変わりの時、予想だにしないアクシデントが起こった。

歩はパニックに陥った。どうすれば良いの？

それが頭の中を駆け巡った。もちろん相手役の魔法使いも同様であった。目配せしながら、アドリブでもう一度長い呪文を掛けるから、何とかして！と言わんばかりである。

そんな時、岡部が手近に有った暗幕を掴むとライトの有る所からその暗幕を垂らして観客から視界を遮ったのである。慌てて早変わりする瞬間が終わると、その暗幕は引き上げられ何とかその場を脱した。

周りで事の成り行きを見守っていたクラス中の者たちは、それでホッと息をつくことができた。失敗に終わったにしろ、何はともあれ繋ぐことは出来たのである。この山場を終えると、お城での王子様とのダンスシーン。しかし、その先にはそれが困難な事態が待っていたのである。

「おい！血が出てるぞ！大丈夫か！？」

どうやら、ライトの場所まで上った際、右太腿を切ったようで、血が滴り落ちている。しかも、出番が近いため、衣装着であった。衣装係はどうすれば良いのかと悩んでいたが、

「はさみをくれ！」

岡部はいきなりはさみを持つと、長いズボンを短く切り刻んだのである。そして、血が滲み出しているその部分に肌色のテープングを巻きつけると、

「短パンの王子でも良いじゃん？」

ニツと軽く笑った。それにつられるように、今まで心配していた歩やクラスみんなは大笑いした。短パンの王子なんておかしすぎる。しかし、怪我人が出たからといって全てを投げる訳には行かないし、衣装の替えも無い。ならこうするのが一番得策かもしれない。笑いを取るのも一興。さすが、こう言う事に慣れているなと思うった。

劇はそのまま続けられる。お城に行ってダンスをし、階段にガラスの靴を忘れて、お触れが出てシンデレラ捜し。みんな知っているお話だけど最後はハッピーエンド。そして、劇は終了した。

歩はホッと息を付くのもつかの間、岡部に保健室に行くように勧めた。テーピングの下から滲み出すことをやめないその血が目についていたからである。

「な〜に、心配要らないって！」

岡部はたいしたことが無いからと拒否したが、歩は心配だった。

「駄目だよ！ちゃんと診てもらったほうが良いよ！私が付き添ってあげるから！もし何かあった時クラス中が気になるんだから……岡部が悪いとクラスって感じしないよ！」

その歩の言動の勢いに飲まれたのか、一瞬真顔になってそれからいつになく照れたように、

「うん。そうするよ……」

素直に保健室へと向かったのである。

#6 摩訶不思議な真実

しかし、保健室に入ったのは良いが、保険医が不在であったため、記録を残し、消毒液を借りることにした。

「ざっくりやってるね……」

「勢いに任せたからな……思いついたら直ぐ行動なんだ俺……」

「羨ましいよ」

「羨ましい？ そうかな……俺的にはもっと考えて行動すべきだと常々反省してるんだけど……本音いうとね、俺は白石さんみたいになりたかったんだ」

「え？」

歩は驚いた。岡部の口からそんな言葉を聞くとは思ってなかったから。

「初めは接点無かったよね？ どう考えても同類じゃ無いし。白石さんは冷静沈着で、落ち着いてて。俺から見ると大人に見えた」

「そんなこと無いよ……ただ『ごく平凡な学生生活を心がける』ってのが私の生きる道だとそう考えてただけだもの……」

思わず隠し続けていた本音を吐き出していた。

「ごく平凡？ 何でそう思ってたの？」

「……平凡じゃ無いと、もう一人の私が動き出すからよ」

「もう一人の私？」

そんな話をしていた時、突然保健室のドアが開いた。歩はその先を見て、

「お母さん!？」

真っ青な顔をして母が入ってきたのである。

「歩、怪我どうしたの!？ ドレスに血が付いてるのが見えたから……」

どうやら、勘違いをしたらしい。しかし、岡部を手当てしている歩みを見た瞬間、肩をなでおろした。

「早とちりだよ……でも、ドレスに血が付いてたなんて良く分かったね？私が気が付かなかったのに」

着ているドレスを広げながら言う。

「あ、本当だ。ちよつとじゃない……」

「何年母親をやっていると思うの？あなたがお腹の中にいるときじゃない！確かに良い母親だとは思ってはいいわよ。でも……」

いきなりそんなこと言われても……と、歩が困っていると、岡部が口を出してきた。

「こんにちは、俺岡部と言います。今、白石さんにお世話になってます」

椅子に腰を掛けたまま岡部は丁寧にお辞儀をする。

「今、もう一人の私。って話していたんですが、どう言う事なんですか？お母さんは知ってらっしゃるんです？」

岡部は何を思ったのか、唐突に訊き始めた。それに対して母は、ドキリとして困惑の表情をした。

「やはり、話をしておいたほうが良いわね……」

やっと話せると肩の荷を下ろしたらしい。歩むが生まれる前の話をし始めたのである。

それによると、歩は双子で産まれてくる予定だったとの事だった。しかし、ある日の検診で今までのはずの……エコーに映るはずの片方がどう言う訳か綺麗さっぱり消えてしまっていたのである。決して流れたはずでもない。不可思議な出来事だったため、忘れようにも忘れられない事件になった。それが、母が歩に今まで話せずにいたことであつた。

「やっと分かったよ。もしかしたら、もう一人の私は、その産まれてくるはずだったはずの双子の片割れなのかもしれないね？二重人格だっと思ってたけど本当は、その消えてしまった子の魂を受け継いでいたのかも……私はそんな風に生きたくはないって……」

歩は心なしか寂しい気持ちになった。でも、

「そうね……だけど夜出歩かなくなったのも、その子が納得したんじゃないかしら？ 歩の思いを察知して……」

これで、歩の謎は解き明かされた。事実を知らされてスッキリした気がする。今まで忌み嫌っていた自分を解き放ったようで……

岡部の前で解き明かされた謎。それに関して別段気にしている様子は無かった。逆に、

「あゝ残念だったな。最優秀クラスに選ばれなくてさ！ 商品欲しかった」

みんな頑張った。それで良いじゃ無いか？ と連発していたのに、歩の前では本音をさらけ出すようになった。意外に子供っぽいんだと分かるようになった。それだけでも身近に感じる事が出来るようになって良かったと思った。これも、平凡なことなのかもしれないけど、今まで考えていた平凡とはまた違う平凡。

日常が楽しくなるようなそんな気持ちをもてたらそれはそれで良いのかも知れない。

やっと手に入れたこの気持ちを、二重人格のもう一人の私に捧げる。

やりたい事、楽しいと思えること、を片っ端からやってみよう。そう心に決めた。

それが、白石歩の生きる道なのだから……

■出せない手紙への追伸■

私は、今を大切に生きてます。

双子で産まれてくることが出来なかったあなた。

この道を一緒に歩もう。そして、たくさんの人に出逢い、共に感じあおう。

そして、感謝しよう。

全てのことに……

#6 摩訶不思議な真実（後書き）

これで、このお話は終わりです。

平凡なんて、人それぞれ。そして、感じ方も。

歩はそれを理解した。きっとそのおかげで、もう一人の自分を吸収してしまえたのではなからうか。

ファンタジーと言うかオカルトと言うか。そう言うのも少し取り入れて見た作品でした。

最期までお付き合いありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2885d/>

もう一人の私へ・・・

2010年10月8日13時25分発行